

児童生徒の感情形成についての教育学的考察

黒田 耕司

An Educational Consideration about the Student's Emotion Formation

Koji Kuroda

Summary

A human emotion was classified by many people from the old days. But, such classification didn't get used to the classification of the emotion which made a language expression reflect. The subject of language of the elementary school has an important role for formation of the student's emotion. So, the word expressed by the emotion in the textbook of language of the elementary school was analyzed, and examined about the method with the subject in the emotion formation in this paper. It was proved that it was a serious subject to combine an emotion with logical thinking in today's emotion education as that result.

1. はじめに

近年、小中学生の意識調査の結果として、下記のような状況が報告されている。例えば、「過去の失敗をくよくよ考えることがある」かどうかということについては、「よくある」「ときどきある」と答えた児童生徒は、51.4%であり、「ひどく怒ったり、乱暴をしてしまうことがある」については、「よくある」「ときどきある」と答えた児童生徒は、26.2%であった。さらに、「腹が立つとつい手を出してしまう」については、「よくある」「ときどきある」と答えた児童生徒は、29.5%であり、「小さなことでイライラすることが多い」については、「よくある」「ときどきある」と答えた児童生徒は、35.5%であった⁽¹⁾。ここでは、近年の小中学生の「怒り」と「厭」の感情の状況が示されている。こうした感情は、少中学生の思考や行動を強く規定するものとなるということが懸念され、教育上、極めて重大な問題状況として把握される必要がある。従って、今日の子どものあらゆる感情の状況を正確に把握することとともに、その感情をどのように教育するかということが重要な研究課題となっている。

学校の道徳教育においては、「道徳教育の目標は、…学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする」とされ、「道徳的な心情」や「感動する心」を育成することが目指されている⁽²⁾。さらに、道徳の時間の内容として、「美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ」といった教育内容が規定されている⁽³⁾。

一方、学校の国語教育においては、感情は特別な内容項目としては設定されてはいないが、国語科における教材を、「生活を明るくし、強く正しく生きる意志を育てるのに役立つこと」「生命を尊重し、他人を思いやる心を育てるのに役立つこと」「自然を愛し、美しいものに感動する心を育てるのに役立つこと」といった観点に配慮して取り上げるべきものとされている⁽⁴⁾。

さらに、「我が国の先人たちが築き上げてきた詩歌等の文学を読むことなどによって、すなわち国語を通して、美しい日本語の表現やリズム、人々の深い情感、自然への繊細な感受性などに触れ、美的感性や情緒を培うことができる。…学校教育における国語の位置付けについては、国語があらゆる教科の中核であることを認識して、質的にも量的にも充実を図っていくべきであり、特に小学校段階においては極めて国語が重要であることを踏まえ、その一層の充実を図っていくべきではないか」とされている⁽⁵⁾。国語科が小学校段階において、全教科の中核科目として、また子どもの感情や感性や情緒の育成にとって重要な役割を持っているということである。

感情の教育については、言葉による学習だけで行われるものではなく、行動・実践の指導と一体として完遂するものであるだろう。「情意を教育する方法の基本は、まずそのような情意を伴うような行動をさせ、次いで、その時感じられた感情を意識させ、さらにそのような感情や、もっていると説明される意志を、言語で規定することである。しかし他方で、実際に行動させることなしに、言語を用いて、他人がある行動をした時にある感情を感じたという話を聞かせたり、あるいは、ある状況ではこのように行動しなさい、という指示を教えることもある」とされるのである⁽⁶⁾。そこで、本稿では、国語における教材が、どのように感情に配慮して作成されているかということに視点を限定し、小学校の国語の教科書における感情語を分析することによって、感情教育における教材のあり方について考察したい。

2. 子どもの「こころの火」への着目

児童生徒の感情形成という際の「感情」とは何か。感情教育の際にまず問題となるのは、感情をどのようにとらえるかという問題である。人間の感情については、古来、多くの見解が出されてきた。

古代、アリストテレスは、「情念」を、魂の中に「超過する」か「不足する」か「中の状態」（中庸）であるかによって成立するものとし、例えば、「怒りっぽい」「怒りを知らぬこと」「穏和」といったような情念として分類した⁽⁷⁾。近代には、デカルトが、人間の感情（情念）は、「驚き」が最初に現れ、「愛」「憎しみ」「欲望」「喜び」「悲しみ」の6つの基本情念を基にし、その結合によって、「重視と軽視」「高邁と高慢」「謙虚と卑屈」「崇敬と軽蔑」「愛と憎しみ」「欲望」「希望」「不安」「執着」「安心」「絶望」「不決断」「勇気」「大胆」「競争心」「臆病」「激しい恐れ」「悔恨」「喜びと悲しみ」「嘲り」「うらやみ」「憐れみ」「内的自己満足と後悔」「好意と感謝」「憤慨と怒り」「誇りと恥」「いやけ」「心残り」「爽快」といった情念が形成されるとした⁽⁸⁾。

その後、心理学、社会学、生物学、精神分析学、生理学、神経学、等の多様な分野から、どの感情が原基的であるかについて検討されてきた。その結果、例えば「幸せ」「恐れ」「怒り」「悲しみ」

といった感情が原基的であるとされてきた⁽⁹⁾。また、「恐れ」が、あらゆる動物が、危険と被捕食を避けるために必要なもつとも原基的な感情であり、「嫌悪」「恐怖」「怒り」「愛」「悲しみ」「満足」といった感情が基本感情であるとも、様々に規定されてきた⁽¹⁰⁾。

しかし、そうした感情分類は、「言語表現面に反映した感情のあつかいにはなじみにくい」と考えられるため、本稿では、「喜」「怒」「哀」「怖」「恥」「好」「厭」「昂」「安」「驚」の10の感情によって感情が表現された言葉（感情語）を分類し、小学校で使用されている国語の教科書に、感情がどのように記述されてきたかということ进行分析した⁽¹¹⁾。その結果、下記の【表1】のように、5社の国語の教科書（平成21年版）の文章表現の中に感情語が表現されていた。

【表1】

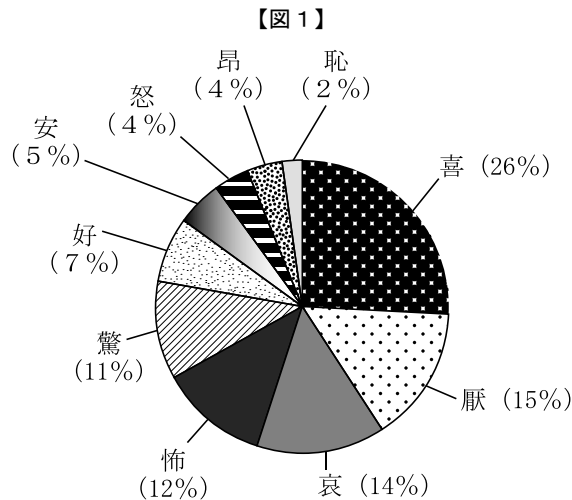
出版社	学年	喜	怒	哀	怖	恥	好	厭	昂	安	驚
教育出版	1	たのしい、うれしい		かなしい			すき	しょんぼり			びっくりする
	2	うれしい、ゆう気がわく、いい気持ち		かわいそう		はずかしい	すき	つまらない、がっかりする		安心する	
	3	楽しい、うれしい、よろこぶ		かなしい	おそれる、こわい		すき	きらい		ほっとする	おどろく、びっくりする
	4	わらう、楽しい、うれしい		なく、あわれ、かわいそう		はずかしい	すき	きつい	いらいら、じれったい	ほっとする	おどろく、びっくりする
	5	喜ぶ、うれしい			ぞっとする、おそろしい		はずかしい				おどろく、びっくりする
	6	うれしい、楽しい、わくわく		独りぼっち、悲しい、さびしい、せつない	こわい、心配する、おそろしい		なつかしい、好き				びっくりする
光村図書	1	たのしい、うれしい	おこる	かなしい、かわいそう	しんばいする		すき、大すき	いや			びっくりする、おどろく
	2	うれしい、楽しい、しあわせな気持ち		さびしい、かなしい	おそろしい、こわい			残念、こまる、いや、くやしい			びっくりする
	3	うれしい、楽しい		かわいそう	こわい		すき、気に入る				びっくりする
	4	うれしい、楽しい、喜ぶ	おこる	かわいそう				いや、つまんない、がっかり	もどかしい	ほっとする	
	5	うれしい、楽しい			気になる	きまりが悪くなる、赤くなる	好き	いやになる、がっかりする			びっくりする、おどろく
	6	うれしい、いい気持ち、こころいい		悲しい、痛ましい、さびしい	こわい、心配する、おそろしい		かわいい、好き、大好き	厭だ、くやしい			おどろく

児童生徒の感情形成についての教育学的考察

出版社	学年	喜	怒	哀	怖	恥	好	厭	昂	安	驚
東京書籍	1	すてき、おもしろい					すき	きらい			
	2	おもしろい				はずかしい	すき	しょんぼり			びっくりする
	3	うれしい、おもしろい		なきそう	こわい		すき	しかたない、くやしい、あきれ			はっとする、すごい、たいへん
	4	よかった、楽しい、喜ぶ、大喜び、いい	がまんできな、おこる、むかつく	なみだがながれる、かわいそう	こわい			ひどい	あせる、じれったい	ほっとする	おどろく、びくっとする、びっくりする
	5	楽しい、しめた、すばらしい、うれしい、喜ぶ、おもしろい、よい、痛快な	いまいましい	悲しい、つらい、かわいそう	危険がいつぱい、おびえる、こわがる、こわい、おそろしい、ふるえる				どっちでもいい	だいじょうぶ、しめた	びっくりする
	6	笑いをかみしめる、うれしい、おもしろい、すばらしい	がまんができない	なみだぐむ、きびしい、悲しい							
日本出版	1	うれしい、たのしい、きもちいい		さみしい、かわいそう、かなしい、せつない	こわい			いや			びっくりする
	2	よろこぶ、うれしい、いい気持ち、しあわせな気持ち		かなしい、ふしあわせな気持ち、だめ、おしまい、すまない	きもちがぢむ			いや、あきあきする、くるしい		ほっとする、あんしんする	
	3	よろこぶ、うれしい	おこる	かなしい	こわい			くやしい、くるしい	ときどきする	だいじょうぶ	びっくりする、おどろく
	4	うれしい、楽しい、喜ぶ		かわいそう、あわれ	心配する、うす気味悪い、気になる			くやしい		ほっとする	おどろく、びっくりする
	5	いい気持ち、心があたたかい、喜ぶ、楽しい、おかし	おこる、けしからん		こわい、うす気味悪い			たいくつ、ゆううつになる、苦しい、こまった、いまいましい	わくわく	だいじょうぶ	おどろく、びっくりする
	6	楽しい、うれしい、夢のよう、喜ぶ	おこる	かなしむ、悲しい	心配になる、こわい、おそろしい		あこがれる、好き、なつかしい	きらい、苦しい、いやになる	じっとしていられない、いらだつ、もどかしい、はらはらする	やすらぐ	びっくりして、おどろく

出版社	学年	喜	怒	哀	怖	恥	好	厭	昂	安	驚
学 校 図 書	1	うれしい、 よろこぶ、 いい気もち、 大よろこび、 たのしい									
	2	うれしい、 よろこぶ		かなしい	こわい		すき	こまる、 いやになる		安心する	びっくりする、 あわてる、 ぶつたまげる
	3	うれしい、 楽しい、 よろこぶ		かなしい、 かわいそう	こわい			くやしい			
	4	うれしい、 喜び、 待ちこがれる	むかつく	かわいそう、 さびしい	こわい、 心配な		好き	いや、 くやしい、 苦しい	うきうき する	ほっとす る	あわてる、 あきれる、 おどろく、 びっくりして
	5	わくわくする、 大喜び、 うれしい、 楽しい、 気持ちがいい	おこる	気の毒	どきどきする、 不安な、 心配な、 気にかかる、 こわい、 ぞっとする、 気味が悪い		好き	きらい、 むねがいたむ、 うらむ、 いや、 むかむかする		安心する	おどろく、 あわてる
	6	楽しい、 喜ぶ、 うれしい	いかり	悲しみ、 さびしい			はずかしい	好き、 なつかしい	つらい	興奮し、 いらいらする	

上記のように、小学校の5社の国語の教科書の文章表現の中には多くの感情語が表現されているが、その実数を概観すると、喜97、厭56、哀50、怖45、驚42、好26、安17、怒16、昂14、恥7となる（表出割合で表記すれば【図1】のようになる）。



ここから、小学校の5社の国語の教科書の文章表現の中には、「喜、厭、哀、怖、驚」の五つの感情語が全体の感情表現の約8割弱（78%）を占めているということである。子どもはその成長とともに、自己の行為を引き起こす感情を認識の対象とし、その感情を構造化し自己調節することを児童期の中期・後期から思春期にかけて達成させるとされる⁽¹²⁾。その結果、子どもが言葉で表現する語彙は、「快感情よりも不快感情を表わす語彙の方が多い」とされている⁽¹³⁾。成人は「不快感情」を表現する語彙を多用するが、子どもにとっては「快感情より不快感情の表現のほうが、主体にとって切実」であるのである。その点では、小学校の5社の国語の教科書の文章表現の中に、「喜、厭、哀、怖、驚」の五つの感情語の中に「厭、哀、怖」の感情語が多く含まれている（全体の41%）ということは極めて適切な状況である。

しかし、「不快感情」の中でも、「怒」は児童期に頻繁に見られる情動的反応であることにも注目しなければならない。子どもにとっては、「怒」を引き起こす要因（環境刺激）が多いからである。家庭と学校の環境は、子どもの怒りの強さと頻度を決める重要な役割を果たしていると考えられるのである。従って、家庭や学校でのしつけや訓練の仕方が、子どもの怒りの爆発の頻度と強さに影響を与えると考えられるのである。「よく罰せられる子どもは、全般的には、最も怒りを経験しやすい。さらに親が子どもの行動を、親が社会的に承認されると考える型にはめようとするほど、子どもは怒りを爆発させやすい」とされ、子どもの怒りに対する感受性は「その発達段階の限界やその発達水準に特徴的な衝動や、勢力、活動傾向によって左右される」とされる。子どもは、身体的な不快、身体の活動の妨害、入浴や着衣のような身体の世界に関連した活動等に対して怒りを爆発させて反応し、あるいは、所有することを妨げられて怒り、欲望を妨げられたり進行中の活動を阻止されたり注意を受けることによって怒るのである⁽¹⁴⁾。さらに、感情の表出は、社会的な習慣によって異なっており、子どもは社会化される過程で、感情表出とその制御方法を修得すると考えられる。そのため、「日本社会においては集団内の和が強調され、…自己主張・実現よりも自己抑制が重視され、子どもの発達もその方向に導かれている」のであり、「日本人はイギリス人などに比べて、他者に対する怒り表出を抑制する傾向が強い」とされる⁽¹⁵⁾。ということからすれば、「怒」について、教育的に指導することが必要であり、その点からすると、「怒」の表出割合が全体の4%であるということに不安を感じざるを得ない。

小学校の5社の国語の教科書の文章表現の中には、「好、安、怒、昂、恥」の五つの感情語の表出割合が約2割強（22%）を占めている。このことから、「怒」の感情語の教育が、今日の感情教育においてどのような必要性があるかということが重大な関心事となる。

さらに、子どもは、生後3年目の前後の時期には、客観的に自己を覚知し、一定の基準、規則、目標をもった評価的自己意識的情動としての「恥」の情動を生じさせると考えられる。「一般的にいえば、情動は情動についての思考を生み出し、次にそれが自己を対象化させ、新しい自己意識的情動を生じさせるのである。自己意識的情動は3歳までに示されるけども、新たな基準や規則、目標が作り出されることに伴い、また、新たな行為や思考、感情が表出されることに伴って、分化と精緻化の過程は生涯続いていく」と考えられるのである⁽¹⁶⁾。だとすれば、小学校段階において、「恥」について

の教材による感情の育成は極めて重要な課題となるが、小学校の5社の国語の教科書の文章表現の中では、「恥」についての教材が十分に提示されているとは考えられない。思春期になると、子どもは自我の発達に伴い「発言が間違うと恥ずかしい」「スポーツができないと恥ずかしい」「人前で話すと恥ずかしい」といった、「恥」について極めて重大な関心をもつといったことを考慮すると、教科書におけるこうした感情表現の実態に注目し、意図的に教育内容を補完することが必要である。

次に、「感情表現の種類」としては、下記の【表2】ように「感情語の表出の割合」として最も多いのは「喜」であるが、「感情表現の種類」としては、「厭」の表現が最も多くなっている。学習主体の児童の共感を呼ぶことは十分に予想できる。その他の感情語については、「感情語の表出の割合」と「感情表現の種類」との間に特別に目立つ関係はないようである。

【表2】

感情語		感情語の種類 (実数)	感情語の種類 の割合 (%)	感情語の表出 の割合 (%)
厭	しょんぼり、つまらない、がっかりする、きらい、きつい、いや、ざんねん、こまる、くやしい、しかたない、あきれ、ひどい、どっちでもいい、つらい、ばかばかしい、あきあきする、くるしい、たいくつ、ゆううつになる、いまいましい、むねがいたむ、うらむ、むかむかする	23	19	15
喜	たのしい、うれしい、ゆう気がわく、いい気持ち、よろこぶ、わらう、わくわく、しあわせな気持ち、こころいい、すてき、おもしろい、よかった、大喜び、しめた、すばらしい、おもしろい、痛快な、笑いをかみしめる、心があたたかい、おかしい、夢のよう、待ちこがれる	22	19	26
哀	かなしい、かわいそう、あわれ、独りぼっち、さびしい、せつない、痛ましい、なきそう、なみだながれる、つらい、なみだぐむ、さみしい、ふしあわせなきもち、だめ、おしまい、すまない、気の毒	17	14	14
怖	おそれる、こわい、ぞっとする、おそろしい、心配する、気になる、危険がいっぱい、おびえる、こわがる、ふるえる、きもちがぢむ、うす気味悪い、どきどきする、不安な、気にかかる、気味が悪い	16	14	12
昂	いらいら、じれったい、もどかしい、あせる、どきどきする、わくわく、じっとしてられない、いらだつ、はらはらする、うきうきする、興奮し	11	9	4
驚	びっくりする、おどろく、はっとする、すごい、たいへん、びくっとする、あわてる、ぶったまげる、あきれ	9	8	11
好	すき、なつかしい、大好き、気に入る、かわいい、あこがれる	6	5	7
怒	おこる、いかる、がまんができない、むかつく、いまいましい、けしからん	6	4	4
安	安心する、ほっとする、だいじょうぶ、しめた、やすらぐ	5	4	5
恥	はずかしい、きまりが悪くなる、赤くなる	3	3	2

「感情表現の種類」としては、「うれしくてうれしくて」（光村図書5年下）といった「感情の反復表現」の表現が見られることにも注目することができる。「感情の反復表現」は、修辞上は特別な意義が認められないとしても、子どもが好んで用いる感情表現の形態であるために、子どもの感情語の発達段階を知ることができるものであるが⁽¹⁷⁾、国語の教科書にもそうした「感情の反復表現」が見られることから、その影響力を感じることができる。

さらに、「だけど…だいじょうぶ」（東京書籍5年上）「それでも気になるので」（日本文教出版4年上）といった「感情語と論理語の結合」の表現が見られることに注目する必要がある。古来、「感情」（passion）と「理性」（reason）は、対立的な構造を形成するものとして、長く西洋哲学や文学の中で取り扱われてきたが、近年の脳科学の発達によって、現在では「非合理性を前提とする情動観」は大幅に揺らぎ、連関と協調の相互装置としてのその両者の特徴づけが行われてきている⁽¹⁸⁾。そして、私たちの情動や感情は、外界や身体から贈られてきた刺激を大脳辺縁系が認知し、さらに大脳新皮からの指示や記録を受けて、生存に必要な情動として発生させたものであるということが明らかにされてきている⁽¹⁹⁾。

今日、「課題や遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい」「指示に従えず、仕事を最後までやり遂げない」「面と向かって話しかけられているのに聞いていないようにみえる」「学習などの課題や活動を順序立てて行うことが難しい」「気持ちを集中させて努力し続けなければならない課題を避ける」「気が散りやすい」「手足をそわそわ動かしたり、着席していてもじもじしたりする」「授業中や座っているべき時に席を離れてしまう」「きちんとしていなければならない時に、過度に走り回ったりよじ登ったりする」等の困難をもつADHD（Attention Deficit Hyperactivity Disorder）の子どもに対する指導として、自信回復や自尊心（自己有能感）を確立させること、自分で自分の行動を振り返ったり、他者が自分をどうとらえているのかを理解させるために、叱責よりは、達成させたことを褒めるということが重視されている⁽²⁰⁾。ここには、子どもの「感情語と論理語の結合による指導」の原則が見られる。

子どもの意識調査によれば、小学生は、中学生や高校生よりも、「論理的に（すじ道を立てて）ものを考えること」を除くすべての項目において、スポーツをしたり、体を動かしたり、パソコンを使ったり、ものを覚えたり、わからないことや知らないことを調べたりすることに対して、得意であると感じている割合が高いとされている⁽²¹⁾。小学生が、そのような有能感をもっていることは、発達論的にみると好ましいことであるが、そこには、活動によって得られた達成感情が小学生にとっては重要な精神的な糧となっており、同時に論理的な思考と結合させなければならないという課題を持っていると考えられる。子どもの感情語を記述した国語等の教科書の役割は極めて重大である。

3. 「生活近接」を基底とする実践

今回の感情語の分析においては、五感の感覚からつくられる感情、すなわち「ほっかほっか」「のどがかわいた」「あたたかい」…といった「感覚感情」については分析を行わなかった。しかし、感覚感情については、また重要な教育的な研究課題があると思われる。例えば、子どもたちは、「視覚」によって外界の属性を感知し、そこから「美しい」「醜い」「汚い」「眩しい」「かわいい」等といった感覚感情を発生させる。さらに、「聴覚」によって、「騒々しい」「うるさい」等の感覚感情を発生させ、「触覚」によって、「涼しい」「暑苦しい」「窮屈」等の感覚感情を発生させ、「味覚」によって、「美味しい」「不味い」等の感覚感情を発生させ、「嗅覚」によって、「いい匂い」「臭い」等の感覚感情を発生させる。そして、そうした感覚感情を基にして、そこからより主観的な感情を発生させると考えられるからである。精神分裂症に関して、以前は「感情の鈍麻」という言われ方がよくされたが、最近では、「感情の鈍麻」というより「感情の偏り」といった見方や、現実とのかかわりの問題であるということが指摘されている。そこでは、感覚器官を通して、外界と現実をどのようにとらえるかということが問題となっているということである⁽²²⁾。今後の感情語の研究は、感覚感情も含めて、中学校や高等学校、あるいは高等教育機関での感情語の調査を含めて継続されることが必要であると思われる。

【引用・参考文献】

- (1) 第4回「情報化社会と青少年に関する意識調査」内閣府、平成14年。
- (2) 『小学校学習指導要領 平成20年』第3章道徳、第1。
- (3) 『小学校学習指導要領 平成20年』第3章道徳、第2、第5学年及び第6学年、3-3。
- (4) 『小学校学習指導要領』第2章第1国語3-2。
- (5) 「これからの時代に求められる国語力について」文化審議会国語分科会、平成15年1月29日。
- (6) 竹田清夫『再考・「心の教育」—情意の教育』東信堂、1993年、210頁。
- (7) 『世界の名著 8 アリストテレス』中央公論社、1972年、542頁。
- (8) デカルト『情念論』岩波書店、2008年、53～62頁。
- (9) ジョナサン・H・ターナー『感情の起源』明石書店、2007年、95頁。
- (10) リタ・カーター『脳と心の地形図』原書房、2005年、118頁。
- (11) 中村明『感情表現辞典』東京堂出版、2009年、13頁。
- (12) 『新・児童心理学講座 第6巻 言語機能の発達』金子書房、1990年、260～269頁。
- (13) 同上書、259頁。
- (14) E. B. ハーロック『児童の発達心理学 上』誠信書房1971年、377～378頁。
- (15) 湯川進太郎編『怒りの心理学』有斐閣、2008年、44頁。
- (16) M. ルイス『恥の心理学』ミネルヴァ書房、1197年、115頁。
- (17) 拙論『「道徳」の授業に対する大学生の『感想文』の分析』『道徳教育方法研究12』日本道徳教育方法学会2006年、32頁。
- (18) 高橋雅延編『感情と心理学』北大路書房、2002年、2頁。
- (19) リタ・カーター、前掲書、79～108頁。
- (20) 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議「今後の特別支援教育の在り方について」2003年。
- (21) ベネッセ、教育研究開発センター「第1回子ども生活実態基本調査報告書」2005年。
- (22) 河野良和『感情のコントロール』河野心理教育研究所出版部、1984年、68頁。